

34 高天神城に関する逸話等の紹介

筆 者 松永 正志

「高天神を制するものは、遠州を制する」と言われ武田・徳川両雄が 浮沈を賭けての大決戦場であり山城としては東海一の堅塁でありました。又、この鶴翁山にある高天神社は高皇座霊神（別命：高木神：高く神聖な生成の力を有する太陽の意）・天菩比命（産業の神）・菅原道真公（学問の神）の三体の御祭神が祀られ霊験あらたかな神社です。

現在、私は高天神社の総代を務めさせていただいております。ことあるごとに鶴翁山（高天神山）に登り、ご参拝、ご登城いただいております皆さんに声をかけさせていただいております。続日本100名城に選ばれていることもあり、全国各地から城好きがお見えになっております。北は北海道札幌市、南は沖縄県宜野湾市、特に山城好きが多くお見えになっております。何故わかるかというが高天神社拝殿脇にノートを吊るしてあり自由に記帳していただいているからです。特に親子ずれも多く、小学生の男の子が両親を引き連れて目を輝かせて登ってくるのは印象的で嬉しくなり、ついつい声を掛けてしまいます。

お見えになる方の中には武田、徳川の武将の縁者も多く県内はもとより愛知県内、山梨県内、長野県内、神奈川県内の方も多くおります。

2023年の大河ドラマは「どうする家康」ですので家康公が活躍した高天神城の逸話など紹介させていただきます。

◎高天神城（鶴翁山）の地質

「太古の大井川は現在とちがって掛川市街付近で太平洋（内海）に注いでいたという、その後、大地と海の運動によって現在のような山容になったという。

礫層である小笠山系（鶴翁山）は浸食しやすく風雨などでどんどん削れ、ケスタ地形となった。」現在も浸食は続いている。 註①

◎戦国時代頃の地形

「これまで高天神城は内陸部にある山城だと思われてきた。江戸期に起こった地震、川の土の堆積、水田にする為の干拓などで内海が消滅したからである。」

戦国時代頃の内海は浜名湖を小規模にしたような東西4キロメートル南北6キロメートルにも及んでいた、鶴翁山から1キロ近くに内海は広がっていた。

註②

◎「難攻不落の名城」の由縁

「放射状にのびるいくつかの尾根、（横矢掛かりの地勢）尾根に築かれたいくつもの曲輪、攻める側は両サイドから矢とか鉄砲の攻撃をもろにうける地形、高天神城の特徴といってよい、尾根が、ちょうどやつでの葉のように入り組んでおり、谷が入りこむ形になっていた。・・・小さな尾根が櫛の歯のように出っばっている形は、軍学者のいう「横矢掛かり」にうってつ

けの地形であった。

城を攻める場合、攻める側は、急な断崖のようにになっている斜面をそのまま攻め登ことはできず、いきおい、谷の奥に進み、そこから比較的ゆるやかな斜面のところをみつけて、そこにとりついて攻め登ることになるが、高天神城の場合、さきに述べたように、やつでの葉のように尾根がのび、その谷がいきりくむ形となっていたので、尾根に築かれた曲輪にはさまれた格好になる。つまり、両サイドから矢とか鉄砲の攻撃をもろにうけたわけである。高天神城が「難攻不落の名城」とうたわれた理由の一つがこれであった。

一城別廓の構え、城の防衛力を増大するために一つの城の中に幾つもの区画を設けていること。東峯の部分だけでも一つの城であり、西峰だけの部分だけでも一つの城である。

そして、もう一つ、地勢の点で注目されるのは、高天神城の築かれた鶴翁山が、完全に独立した山ではなかったという点である。独立はイコール孤立であり、仮に独立した山城であったならば、完全に周囲を包囲されてしまい、簡単に落とされてしまう、しかし、高天神城の場合は西の丸から続く馬場平、そして、馬の背状の「犬戻り猿戻りの険」「楞嚴寺山」によって、小笠山系につながっていたのである。攻める側は高天神城を包囲しても完全に包囲することは困難であった。

これも、高天神城が「難攻不落の名城」とうたわれた由縁である。」

註③

2022年9月26日民放のテレビ番組で歴史の専門家が選ぶ、難攻不落！最強の城総選挙が放映され、高天神城は9位にランクされた。ちなみに、1位は熊本城、2位は江戸城、3位は大阪（坂）城でした。

◎激戦の地、二の丸ゾーン（巻末、図―1 参照）

二の丸ゾーンは、二の丸、袖曲輪、馬出曲輪、尾曲輪、堂の尾曲輪、井楼曲輪、櫓台などで構成されている。「高天神城の二度の落城はどちらも堂の尾曲輪から攻めこまれており、二の丸ゾーンは常に戦いの最前線であり、かなり激しい攻防があった場所である。当然城内の他の場所（東峯の曲輪は小笠礫層の断崖絶壁にかこまれている。）と比べても緊張感が高かったと思われる。

一方では日常生活を営んでいたことを示す多量の遺物が発見されている。」高天神城普請奉行松平家忠の『家忠日記』には「天正9年の戦いでは城の周囲に6砦を築き補給路を断たち、麓の寝小屋を焼き払い長期の籠城戦となり、」と記載されており、山の上での生活を余儀なくされたことがうかがえる。

註④

「堂の尾曲輪では調査前の予想に反して大量の遺物が出土した。土器が大半を占め、器種としては天目茶碗、茶入、小瓶、甕、すり鉢、土鍋、香炉、大皿、かわらけ、弾丸などがある。中には輸入品と考えられる陶磁器も出土している。

井楼曲輪では、堂の尾曲輪に比べ、遺物の量は少ないが、同じ種類出土している。

二の丸では遺物の量が最も多く、堂の尾曲輪、井楼曲輪と種別構成が似ている。出土品の

中に漆膜があり、塗膜構造調査を行なったところ、陣笠の一部である可能性が確認された。」
註④

◎井楼（せいろう）曲輪の言い伝え

天正2年武田勝頼が攻めてきた際、この曲輪では、本間・丸尾の兄弟が櫓（やぐら）に登り兵を指揮しており兜（かぶと）の飾りが輝いていたのを目印にされ、鉄砲に狙撃されたと伝えられている。武田方は林の谷から狙撃したという説もあるが、林の谷は大きな捉え方で、馬場平から西への犬戻り猿戻りの険（甚五郎抜け道）の北側の谷がが茜（赤）根ヶ谷で井楼曲輪の西側にあたり茜根ヶ谷の東端尾根からが狙撃しやすいと推測される。茜（赤）根ヶ谷の尾根（谷の北尾根）も調査すれば戦いの痕跡が残っている可能性はあるように推測する。

「井楼曲輪北端近くの土塁付近では、西側にかけて挙大な礫が多数検出された。これらの石は下方から攻めてくる敵兵に投げつけるための礫である可能性も考えられる。」 敵兵に、丸太を落したり、石礫（つぶて）を投げつけたという言い伝えがある。 註⑤

戦いの頃を想像してみると、城の法面（斜面）は守り易いように樹木は伐採され、見通しをよくし、至る所に各種の堀や土塁を設け、敵兵を退ける工夫をほどこす。地質は礫層で、攻める側は登ろうとすれば表面が崩れ、滑り易く足をすくわれる。生死を賭けた攻防が繰り広げられたであろう。

◎二の丸ゾーンの防衛遺構

曲輪	兵士たちが配置された防御のための区画
堀切＝切り割	曲輪を独立させるための堀
畝状縦堀	土塁と土塁（空堀）が交互に隣り合っている。空堀と空堀の間には土塁があり、土塁と土塁の間に空堀がある。目的は少人数で城を守れるようにするため。
横堀	山城の曲輪の周囲を囲んだ堀
虎口	出入口口
櫓台	物見の台
土塁	土を盛った処 敵兵に鉄砲などで応戦するための防護盾
柵列	雑木などを並べて作られた囲い（高天神城の発掘調査では塀のような構造物の柱穴は確認されなかった。） (発掘調査の結果、横壕は確認できなかった。) (発掘調査の結果、障子堀も確認できなかった。)

◎武田と徳川の武将、義を感じて心の交流

・大河内源三郎正局のこと

徳川家康の血筋で家康の外祖母玄応尼の甥にあたり、源三郎は玄応尼と共に織田・今川人質時代から仕えていた間柄で特別に家康への忠誠心が厚く、軍監として城主小笠原長忠の去

就に不安をもった家康が、高天城に送りこんだ家康直属の家臣であった。高天神城を「死守せよ」と命を受けており開城しては家康公に申し訳ないと 天正2年落城の時（20歳）、このまま一人で籠城して、城を死守すると高天神城から投降しなかった。

「入牢中は投降するように拷問など受けたなか、度重なる降伏の勧告も家康への使者となることも拒否続けた政局、長い風雨の歳月にも生き延びた中、やがて脚部も腐殖を生ずる様になり、衰弱又甚だしく髪は生えるに任せ、着物は原型をとどめず枯れ切った肉体に頑固一徹強情に満7ヶ年の星霜を送り迎えたのである。然も「我が主君、徳川公は格別の大將である。必ずや高天神城奪回に見えられる筈、今となって降伏とは思ひもよらぬ。」と頑強一図に生き延びてきた、その大河内に、甲州の猛将横田甚五郎はその義に感じて陰に日向となり懇に優遇したという。」

註⑥

源三郎は天文23年（1554年）生まれで、石牢から救出された天正9年（1581年）3月25日の年齢は27歳となる。（家康はこの時、39歳）

家康は労をねぎらい、源三郎は津島の温泉に浴し平癒したという。その恩賞として遠江大河内氏と所縁のある稗原（ひえはら）の地（磐田市稗原）を与えている。その後、長久手の戦いに徳川の武将として参戦し遂に討死にした。

子孫は現在も近郷近在に居住している。

ちなみに、源三郎の孫は有名な知恵伊豆こと老中松平伊豆守信綱である。

・横田甚五郎尹松（ただまつ）のこと

武田方の武将（武田24将として有名な鬼美濃こと原虎胤の孫） 天正2年高天神城の戦いでは城は徳川から武田の支配に変わり、勝頼から城番の命を受ける。この時21歳。

天正7年8月城兵交替して岡部真幸城代になるにおよんで軍監となる。天正9年3月23日徳川軍に攻められ、落城時早朝本国の武田勝頼に落城の模様を報告するため馬場平から「犬戻り、猿戻り」という難所を駆け抜け信州を経て甲州へたどりついたといわれている。

武田氏滅亡後は徳川氏に降り、家康に仕え3千石を賜る。長久手の戦い、小田原、関ヶ原の戦いに従軍して功を挙げ、大坂冬の陣、夏の陣に軍功あって2千石加増、寛永年間に御旗奉行に進み禄高旗本最高位の九千石を賜る。82歳で没する。

同年代で主君に近い関係の二人、満7年間の間には日光浴のために牢から出られるようにしたり、髪を整えたり身の周りの世話も配慮したのではと想像する。時には徳川方の情報を聞き出したりしたのではないか、日常の話の中で、横田氏が大河内氏の主君に対する思いに義を感じいり敬意を払い様々な配慮をしたという、1歳違いの若武者同士には心の交流が読み取れ、当時のことに思いをめぐらせる。

◎戦場の安らぎの一時、高館（たかだち）の舞

・『明良洪範』では…

「天正8年（1580）に入ると徳川勢は城の周辺に6砦を築き、堀や柵をめぐらせて厳重に監視したので、翌年3月頃はまったく城内の食料は底をつき、城の命運はまさに風

前の灯であった。いよいよ落城も迫った3月22日、城内の栗田鶴寿（新善光寺別当）は、徳川勢の中にいる幸若与三太夫に「この世の名残に一さし承りたい」と申し入れた。そこで与三太夫は家康の許しを得て城近くに進み「高館」を謡い舞ったが、終わると城中から茜の羽織を着た若衆が出て、与三太夫にお礼の品を贈った。その夜10時ごろ全城兵は一斉に切って出て暗闘の中で大乱戦となったが、城将の岡部丹波守が討死し、城は落ちた。翌朝、首実検のとき16、7歳の美しい生首があったので調べてみると、昨日の若衆で、栗田鶴寿の寵童（ちょうどう）の小姓、常田鶴千代であったという。」

註⑦

・『戦国史城 高天神の跡を尋ねて』 では…

「明日の命運も行方わからぬ3月22日、高天神城本丸の櫓から、寄せての陣中へ矢文が放たれた。家康の陣中に謡の名人のいることを知った栗田刑部の計らいで「幸若与三太夫なる謡の名師が、寄せての陣中に供奉されて居られる由、我等城兵の命、今日明日も期しがたし、哀れ願わくば、太夫に一さし承りて、今生の名残に致したし」との願いの文であった。

家康は「やさしき者の願い、許して遣わす。」とて、太夫を召し出し、「そちが望みに任せる。斯様の時は哀れな曲が良からう。」と、

間もなく太夫自身が本陣から城近く迄進み寄って家康から許しの出た旨を告げた。其処此処での撃ち合いは一時に止み、深い静寂が高天神の山を包んで行った。やがて支度が出来ると太夫は、義経の衣川、高館の段を謡い始めた。城将栗田刑部は一族の鶴寿丸、彦兵衛などを引き連れて、櫓に登り、大夫の高館の謡に耳を傾けた。城兵は何れも塀際により集って一同寂として耳を傾け、城兵すべてが言合せたかの様に感涙に咽びながら聞いたのであった。

謡が終わると、佐竹大ほうと言う紙十帖に厚板の織物一疋それに指添え一振を差し揃えて、太夫に今日の引き出物として贈り「これで思い残すことも無く討ち死出来まする、家康殿によろしう申し上げて戴きたい。」と行って引き返した。

斯くて城兵は潔よく死地に赴いた。23日戦い終って、殊更茜色の陣羽織を着た若武者は天晴れなる働きをして討死していた。首実検の時、顔の様子

16、7歳の頃と見えたが、薄化粧し、歯を黒く染め、髪を長く撫で 着けてあったから男女何れ共見分け難かった。家康は「その眼を明けて見よ、瞳が上に見返って瞼の内に入り、白眼許り（しろめばかり）見えれば女と知れ、瞳が明らかに見えれば男である。」といったので筭（こうがい）で目を開いて調べると瞳が明らかに見えたので男であると分かった。この若者は本丸の城将栗田刑部の最愛の美少年、小姓の時田鶴千代であった。この少年こそ前日太夫の謡いに引き出物をわたした使いの若武者である」

「筭」とは、刀の鞘にさしておき、平時は髪を巻き上げ、戦いには敵の首にさして討ち手を明らかにするもの。

註⑧

・明良洪範（めいりようこうはん）とは

江戸時代中期成立の逸話、見聞集で、16世紀後半から18世紀初頭までの徳川氏、諸大名、その他武士の言行を収録したもの。

「明良洪範」は江戸時代中期成立した書物で正確性に疑問は残る。方や、「戦国史城 高天神の跡を尋ねて」では作者は栗田刑部の末裔（国学者・栗田土満ひじまろ）のお宅（菊川市平尾八幡宮の宮司）を訪ね古文書を見せていただき写したように推察される。

与三大夫が謡い舞ったのは城近くとなっているが、本丸(129.2m)の東北約100mの距離に標高81.8mで舞台ができそうな場所（狭い）はある。一説には家康の本陣とも言われている。そうすると家康本陣は与左衛門曲輪より南西5丁である。一丁はおおよそ110メートル（家康本陣：浅野文庫「諸国古城之図」「遠江 高天神」）広島市中央図書館所蔵）

城兵は塀際によって耳を傾けたというのが、発掘調査によれば塀はなく柵列のあとが（杭の穴）確認されているときく。

・幸若舞の概説

「日本最古の舞楽として約700年の伝統に輝く幸若舞は、歌舞伎をはじめ、全ての芸能や文学に大きな影響をあたえ、日本芸能史の研究に見逃すことのできない舞楽として注目をあびている。

室町初期のころ武士道鼓吹の舞曲としてはじまり足利時代より徳川幕府の初期まで信長、秀吉をはじめ、幾多の武將に愛好され、また諸国大名によって奨励されたため、大いに隆盛をきわめた。徳川の末期より、時代の流れ、趣味の変化、能曲俗歌が盛んになるにしたがった次第に衰え、その家元の越前朝日村（福井県）でも後を絶ち、福岡県山門郡瀬高町大江に「大江のめえ」とよばれて昔時の姿をそのまま伝えている。

昭和51年5月、文化財保護法の趣旨により、国指定重要無形民俗文化財の指定を受けた。」

（平成6年9月18日高天神城跡北駐車場特設舞台で行われた幸若舞上演時の配布資料より抜粋）

◎小笠原氏東退組（巨知氏）について

天正2年高天神城は武田勝頼に攻められ、徳川家康に援軍を求めた。しかし、家康は三度までも高天神城の援軍要請の狼煙に全く動かず、同盟を反故（ほご）にし、高天神城を見殺しにしていた。

武田方の猛攻は日一日と熾烈をきわめ、城中兵糧は乏しくなり、又弾丸も尽き疲れ果て、如何とも策の施し様なく援軍も来ず遂に開城に決した。そして武田方に従った者を東退組、徳川方に従った者を西退組と称した。

家康はじめ徳川方は、この事実が世に知られば末代までの恥になると思い、その後、小笠原長忠をはじめ高天神小笠原一族の抹殺を謀らんだ。

小笠原長忠は天正2年7月高天神城開城後、武田勝頼に仕え、弾正少弼信興と改称し

た。武田氏が衰退に及んで北条氏に仕え、天正18年7月7日小田原城落城の節、家康の命によって鎌倉の隠家（かくれが）から連れ出され死を命ぜられた。

時は過ぎ、1991年（平成3年）5月12日高天神城跡に於いて高天神社氏子らでつくる「高天神戦国ロマンの里を育てる会」主催の「高天神攻防将士の末裔交流会」が開かれ今川方・武田方・徳川方の27家46人が集まった。

このような会を開いてくれて嬉しいと参加された皆さんは喜んでいて。

その中に福岡県直方市（のうがた）の巨知（こち）光彦氏が出席し、小笠原興八郎長忠の末裔であると紹介がなされた。本人がまとめた「遠江国高天神小笠原氏の攻防の歴史」56ページが披露された。

その内容を概略記述すると、「長忠より7代後裔の豊前小倉藩士の小笠原太郎兵衛長常は徳川將軍家の命により家系図を他の家臣と共に公儀に差し出し、その中で、長常の嫡男小笠原平四郎長好の名前が公儀の目にとまり、出目についてお咎（とがめ）があったと推測される。巨知氏系図によれば「故あって跡目断絶となる」とあり、平四郎長好が亡くなると家禄は召し上げられた。小倉藩主忠雄公の命により、妻を娶らず跡式断絶とするより他、逃げる道はなかったのである。

將軍は家光の時代で家康、秀忠も既に亡くなり油断した。没落した小笠原氏の名を惜しんで付けたことがあだとなった。全く運が悪いとしか言いようがない。

そこで、小笠原太郎長常の弟、小笠原三九郎景之が家系を継ぐこととなり、平四郎長好の愛刀、小田住相模守藤原清平と小笠原興八郎長忠の武将図を譲り受けた。そこで、公儀の詮索も厳しいため先祖母方の名を借り、巨知性に変名し、巨知六左衛門景之を名乗り、公儀の暗殺から逃れたのである。

そもそも、巨知氏とは弥生時代に古代朝鮮より渡来した新羅王朝の流れといわれ（一説には百済とも）豊の国において、秦氏、新羅氏等と共に、宇佐八幡宮の御神鏡作りの頭領をしていたと言われている。

戦国時代には、巨知氏は武田信玄の一武将として、群馬県前橋の上州石倉城主となっていた。その、巨知下総の娘を三代高天神城主、小笠原興八郎の嫡男、小笠原興三郎長徳が妻に迎えていたので、その巨知氏を小笠原三九郎景之が名乗ったという次第である。」

その後の様子はここでは省略（「遠江国 高天神小笠原氏の攻防」）大東図書館所蔵、郷土資料の棚に有り 註⑨

◎高天神城生まれの剣豪

「小笠原源信齊長治、新陰流の名人、高天神城主小笠原長忠の腹違いの弟（一説には孫）東退組として長忠に従い武田氏支城の興国城に移り武田氏滅亡後、小田原北条氏の家臣となり家康の抹殺を受けたが幼少期からの奥山流新陰流剣術鍛錬の天賦の才により生き延びた。その後、浜松引佐の奥山休賀斎公重（上泉伊勢守に学ぶ）と寝食を共にし、大明国にも渡りあらゆる武芸を取得した後、江戸（三代家光の時代）に出て小笠原源信齊と名乗り道場を開き奥山新陰流剣術を教え、一時期は門弟三千人と称した。小笠原源信齊長治

は上泉伊勢守、奥山休賀斎の道統を引き継いだもう一つの新陰流の名人だった。」

以上は、津本陽 新陰流小笠原長治の要約です。歴史小説ですので多少フィクションもあることですが、まぎれもなく高天神城生まれの剣豪である。

註⑩

名城、高天神城の素晴らしさはまだまだ世に知られていません、山城として比類なき郷土の至宝です。現地を訪れ往時を偲んではいかがでしょうか。

表— 1

年 表 (天正時代)	
天正 2 年 6 月	高天神城の戦いで、城は徳川から武田の支配に変わった。 (高天神小笠原氏は東退組、西退組に分かれる。)
同年 6 月	武田勝頼の命で城番として横田尹松、高天神城に入る。
同年 6 月	徳川の家臣、軍監大河内源三郎正局、入牢 (東退組・西退組どちらにも加わらないので城主長忠の命で入牢又は、勝頼の命で入牢かはっきりしない。)
天正 7 年 8 月	横田尹松 岡部真幸城代になるにおよんで軍監となる
天正 9 年 3 月	高天神城の戦いで、支配は武田から徳川となる。 高天神城は廃城 (焼き払われる。)
同年 3 月	大河内源三郎正局、石牢から救出
天正 10 年 3 月	武田勝頼、織田・徳川連合軍に攻められ天目山で自刃
天正 10 年 6 月	織田信長、本能寺の変で明智光秀に攻められ自刃
天正 18 年 7 月	元高天神城主小笠原長忠殺される。

- 註① 冊子 小笠山 小笠山関係市町村協議会発行
- 註② 静岡新聞連載小説 家康 不惑編 244回「土井比都司著〈高天神攻城戦と郭〉」
- 註③ 高天神城の総合的研究 小和田哲男 108・109ページ
- 註④ 二の丸ゾーン発掘調査報告書 大東町教育委員会 56ページ、図版—12～22
- 註⑤ 二の丸ゾーン発掘調査報告書 大東町教育委員会 20ページ
- 註⑥ 戦国史城 高天神の跡を尋ねて 藤田清五郎 48・49ページ
- 註⑦ 明良洪範（平成6年9月18日幸若舞上演時の配布資料）
- 註⑧ 戦国史城 高天神の跡を尋ねて 藤田清五郎 43・44ページ
- 註⑨ 遠江国 高天神小笠原氏の攻防 巨知光彦（大東図書館所蔵）
- 註⑩ 歴史小説 新陰流小笠原長治 津本 陽